

4-3

学習意欲を高め家庭学習の充実に つなげた多面的な取り組み

栃木県栃木市立皆川中学校校長 石嶋 和夫

はじめに

本地区は、栃木市街の北西に位置し、北・西・南の三方を山に囲まれた静かな田園地帯である。地区内には、11世紀半ばに創建されたと伝えられる神社があり、また、室町期後半から戦国期にかけて本地区を支配した皆川氏が、15世紀前半に築城したと伝えられる典型的な中世の山城「皆川城址」がある。さらに、皆川氏ゆかりの寺院も現存するなど、中世以来の歴史を誇る山間の農村地帯である。

近年、高齢化と少子化が深刻化してきているが、地区内の宅地化や工業団地の分譲は、思うようには進んでいない。そのため、地域の活性化を目指した「まちおこし」や「街づくり」の活動が、粘り強く進められており、郷土を愛し、郷土に生きる人材の育成という観点からも学校教育に対する期待が大きい。特に本地区は、小学校が1校、中学校が1校であるため、様々な形で地域との連携が学校に求められている。



本校は、全校生徒128人で、各学年40人前後の小規模校である。栃木県は、学級編成を35人学級としているため、各学年とも20人前後の2クラスとなっており、通常の授業において既に少人数指導が行われている状況である。そのため、少人数であることを生かした指導を工夫し、実践している。

小規模校であり、少人数であるということは、教職員だけでなく生徒たちも一人で何役も担当しなければならない。しかも、委員会活動や係活動、清掃分担など、担当が二人前後の場合が少なくない。そのため、学級生活や学校生活が円滑に営めるよう、一人ひとりがきちんと自己の責任を果たすことやリーダーとしての役割を担うことが求められる。そこで、学校行事や生徒会活動等を通してリーダーシップとフォロアーシップの育成を図っている。

また、前述したように中学校区の小学校が1校であるため、生徒は9年間一緒であり、生徒間の人間関係が親密である。しかし、その分、一旦人間関係が崩れると、修復が難しく不登校に陥るおそれがある。さらに、生徒間における各自の位置付けが明確化、固定化しやすいので、発言力のある生徒は、どんどん自己主張するが、おとなしく控え目な生徒は、ますます引っ込み思案になりがちである。

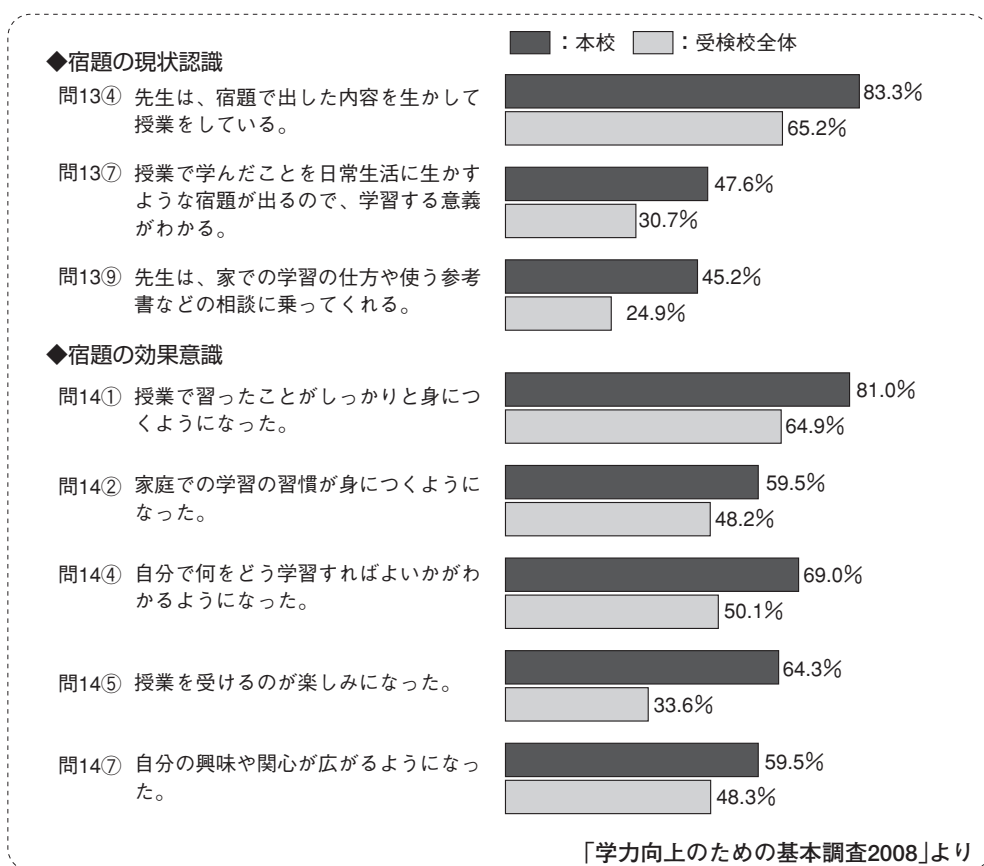
そこで、本校が平成17・18・19年度の3年間、文科省研究開発校として「国際社会に貢献することのできる児童生徒の育成を目的とした、9年間を見通した小中一貫教育の教育課程の編成の在り方について」の研究実践を進めた際には、コミュニケーション能力の育成と人間関係づくりをねらいの一つとした。今年度からは、市教育委員会の指定を受け、小中一貫教育研究の第2ステージとして研究を継続している。これまでの研究の成果・課題を踏まえ、コミュニケーション能力の育成と人間関係づくりとの関連を考慮し、新学習指導要領で示された「指導計画の作成等に

当たって配慮すべき事項」の一つである「言語活動の充実」に重点を置いて研究を進めている。

さらに、栃木市が平成16・17・18年度の3年間、文科省の『キャリア教育推進地域指定事業』の指定を受けた際に、本校と本学区の小学校も研究協力校としてキャリア教育の研究推進に努めた。その研究では、4領域8能力の育成を目指して「学級活動における進路指導を充実させること」と「総合的な学習の時間と進路指導との関連を図ること」に重点を置いて研究を進めた。

こうした状況の中で、「総合学力研究会」(事務局：Benesse 教育研究開発センター)が主催する「学力向上のための基本調査2008」に参加したところ、思っていた以上に、宿題に関する生徒の意識が高かった。質問項目の中で、他校より肯定的回答が10%以上高いものを図表4-3-1に示した。

図表4-3-1 学習意識の状況



これらの要因・背景について、本校の取り組みを振り返ると、次の2点が考えられる。

- 1 『学校教育計画』の学習指導部門における「具体的取り組み」として「家庭学習の充実」を掲げ、重点的に指導してきた。
- 2 「少人数であることを生かした指導の工夫」や「小中一貫教育の研究推進に伴う、人間関係づくりやコミュニケーション能力の育成」、「キャリア教育の推進のための特別活動等の充実」などが成果をあげてきた。

そのため、生徒と教職員の信頼関係や生徒間の交友関係が強化され、学習環境としての人間関係が良好になって、学級活動において実施している「学業と進路」に関する指導などが、より効果的に機能し、学習への意欲や意識の高まりにつながったのではないかと考えられる。

そこで、本校が実施している主な指導や活動の事例を、ここに紹介したい。

1 家庭学習の改善・充実に関する指導

1 家庭学習の充実のための基本的な考え方(『学校教育計画』における位置付け)

①「学ぶ習慣」づくりと学習内容の充実

本校では、学習意欲の高揚と学習態度の育成の両面から「学ぶ習慣」づくりに取り組んでいる。各学期の始めには、学級担任と教科担任が連携し、全校体制で「学習訓練週間」を実施している。また、定期テストの時期になると、学級担任が「学習予定表」を作成させ、「自主学習帳」を提出させている。さらに、学芸委員会(生徒会専門委員会)では、「学習強調週間」を実施している。

一方、生徒の家庭学習の内容を質的に向上させるには、授業を改善するとともに、家庭学習と授業(教科学習)との関連を図ることが大切である。授業の改善については、小中一貫教育第2ステージの研究として、小中学校とも1人1研究授業を実施している。

②家庭学習と授業(教科学習)との関連を図る

本校では、学習内容の定着をより確かなものにするため、各教科において適切な課題(宿題)を出して復習の機会を与えるとともに、課題(宿題)の提出の徹底を図っている。

また同時に、授業内容をよりよく理解できるよう、予習をする習慣づくりのための指導にも努めている。

なお、宿題指導に当たっては、以下のことがらを共通理解して進めている。

- (ア) 生徒の家庭学習に対する意欲と意識を高めるため、復習したり、予習したりしたことが授業で生かせるよう、授業の内容・方法を工夫する。
- (イ) 生徒の家庭学習の習慣化を促すとともに、状況が把握しやすいよう、「自主学習帳」を活用する。
- (ウ) 長期休業中の課題、技能教科の提出物などは、提出するまで粘り強く指導を続ける。

図表4-3-2 家庭学習と授業(教科学習)との関連を図った事例

【国語(小説)】

ねらい	学習材についての内容を把握させる。(予習)
宿題の内容	学習材を読み、初発の感想を書く。語句の意味を調べる。
授業との関連	授業で発表させ、全体の理解度を高める。

【社会】

ねらい	授業で学んだ内容を定着させる。(復習)
宿題の内容	その日の授業内容のところを、ワークブックでやってくる。
授業との関連	次の授業の始めに、やってきた内容を確認する。

【数学】

ねらい	授業で学んだ内容の理解を深める。(復習)
宿題の内容	その日の授業内容のところを、問題集でやってくる。
授業との関連	次の授業の始めに、やってきた内容を確認する。

【理科(化学)】

ねらい	化学反応式を正確に書けるようにする。(復習)
宿題の内容	元素記号、化学式、化学反応式の練習をしてくる。(教師作成プリント)
授業との関連	小テストを毎時間実施する。内容は定期テストに関連させ、結果は評定に組み入れる。得点により、追加の練習プリントを出す。

【英語】

ねらい	授業内容の理解を促す。(予習) 学習した内容の定着を図る。(復習)
宿題の内容	①教科書の本文や単語等をノートに書いてくる。(予習) ②「聞く」「話す」言語活動で用いた言語材料を、自分の考えを付け足してノートに書く。(復習)
授業との関連	①書いてきた本文や単語等を見ながら、音読活動を行う。 ②書いてきた英文にポイントの書き込みをさせたり、言語活動の復習を行うなど、4領域を関連させて授業を展開する。特に、英文の内容を復習する際に、日本語による内容確認から英語による内容確認(Q & A方式)などの指導を行う。

【資料：「英語自主学習帳」の実例】



【音楽】夏休みの宿題

ね ら い	クラシック音楽に親しませる。
宿題の内容	クラシック音楽を鑑賞する。
授業との関連	「鑑賞」の授業のときに、他の曲も紹介する。 授業で「友達が聴いた曲」として紹介する。

2 少人数であることを生かした補充指導の工夫

①補充指導の目的

個に応じた学習指導の一層の充実を図り、生徒の最低限の基礎学力の習得を目指す。

②補充指導の内容と方法

[テスト前]

①テスト範囲表の「学習のポイント」に身に付けてほしい学習内容を具体的に記述する。

②教科担任は、授業において生徒に身に付けてほ

しい学習内容の十分な指導を行う。

また、必要に応じて課題を課し、その取り組み状況を把握する。

③学級担任は、「学習予定表」(図表4-3-3)及び「自主学習帳」等を提出させ、家庭でテスト範囲の学習が十分になされているかを把握し、必要に応じて学習法などのアドバイスを

図表4-3-3 「学習予定表」

○学期○○テスト 学習予定表						
年 組 番 名 前						
日	国 語	社 会	数 学	理 科	英 語	自己評価
						A B C
						A B C

[テスト後]

①教科担任は、生徒のテスト結果から、基礎的・基本的事項が身に付いているかどうかを判断し、「努力を要する」と判断された生徒に対して補充的内容の課題を与え、課題の内容が身に付いたかどうかの確認テスト等を行う。

②補充指導の内容や方法は、各教科担任が教科の特色に応じて適切な方法で行う。その際、具体的な支援策を定めて実施する。

③補充指導の実施後は、「努力を要する」生徒の「学習状況」と「補充指導の内容」を教師専用パソコンに記録する(図表4-3-4)。

図表4-3-4 「努力を要する生徒の学習状況と補充指導の記録例」

教科	生徒名	年組	学習状況 (定期テストの結果から)	補充指導の内容	指導の経過及び 指導の結果
国語	〇〇〇〇	〇-〇	言語事項10点以下	間違えた漢字を20回書いて提出	提出済み
社会	△△△△	〇-〇	期末テスト40点以下	課題を与えて提出させる	提出済み
数学	◇◇◇◇	□-〇	連立方程式、1次関数の基本的な計算が不十分	計算の仕方を確認し、練習後、再テスト	不合格。授業の中で、引き続き支援
数学	▽▽▽▽	△-□	図形の知識と相似比を用いた計算が不十分	授業の中で補充指導(習熟度別学習)	基本的な計算ができるようになった
理科	☆☆☆☆	□-□	期末テスト50点未満	課題を与えて提出させる	未提出
英語	□□□□	〇-□	期末テストで40点以下	課題を与え、再テストを実施	課題の英文は、読めるようになった
音楽	〇▽◇☆	△-〇	鑑賞の領域の正答率50%以下	課題：鑑賞のプリント提出	提出済み
保体	□△〇▽	□-□	保健分野の理解が不十分 期末テスト40%以下	期末テスト(保健分野)の再テストを実施	合格

②グループ指導やティーム・ティーチング

前述したように本校は1学級20人前後であるが、数学においては、TT(2人)で指導したり、クラスを3グループに分けて習熟度別に指導(3

人に対応)したりしている。

また、英語についても、できるだけALTやJTEを加えてTTで行うよう工夫している。

3 学芸委員会(生徒会専門委員会)による学習強調週間の実施

定期テストの1週間前になると、学芸委員会が中心となって「学習強調週間」を実施している。その目的や方法は、以下のとおりである。

①目的

- 定期テストに向け、家庭学習の推進を図る。
- 定期テスト学習予定表の作成と活用を通して、学習意欲の向上を図る。
- 「学習の約束」(学芸委員が、学習強調週間のたびに目標を設定する)の徹底を図る。

②実施方法

- ①学芸委員が目標「学習の約束」を決める。
- ②朝の会でクラスに告げ、それに基づいてクラスの具体的な目標を決める。
- ③帰りの会で「学習強調週間個人票」(図表4-3-5)を配付し、記入させる。
- ④放課後、「クラスチェック表」(図表4-3-6)と「学習強調週間個人票」を学級担任に提出する。
- ⑤学級担任は、クラスの実態を把握し、学級経営に生かす。

図表 4-3-5 「学習強調週間個人票」の実例

学習強調週間 自己チェック表

2年 / 1組

目標1 授業中に無動態をしない。

目標2 積極的に手を挙げる。

目標3 自主学習帳は朝、提出する。(1日2ページ以上)

	17 (日)	18 (月)	19 (火)	20 (水)	21 (木)	22 (金)	23 (土)	24 (日)	25 (月)	26 (火)	27 (水)
1 授業中に無動態をしない。	○	○	○	○	○	/	/	/	○	○	○
2 積極的に手を挙げる。	×	○	×	×	×	/	/	/	×	○	×
3 家庭学習をする。(前日の家庭学習時間)	60分	60分	120分	120分	100分	120分	120分	100分	120分	100分	120分
4 1日の授業	10分	10分	10分	10分	10分	/	/	/	10分	10分	10分
担任印	○	○	○	○	○	/	/	/	○	○	○

*記入方法 それぞれの目標ができたかどうかが○、×で記入しよう。

図表 4-3-6 「クラスチェック表」の実例

第3回学習強調週間 クラスチェック表

2年 / 1組

目標	対応策
1 タイムと分組数	タイムと分組に学習委員がクラスに呼びかけをし、できない人を促す。
2 授業を真面目に受ける。	朝の会で目標をあげる。
3 自主学習帳を2ページ以上行う。	朝のうちに自主学習帳を集める。

チェック項目	1 (日)	2 (月)	3 (火)	4 (水)	5 (木)	6 (金)	7 (土)
① タイムと分組数 を呼びつけたか。	○	○	○	×	○	○	○
② タイムと分組数が まわったか。(名前を 記入)	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
③ 授業を真面目に受ける よう促されたか。	○	○	○	×	○	○	○
④ 授業を真面目に受け られたか。(名前を 記入)	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
⑤ 授業、自主学習帳を集 められたか。	なし	○	○	○	なし	○	○
⑥ 自主学習帳の提出が できない人 (名前を記入)	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
担任印	○	○	○	○	○	○	○

2 授業の改善・充実に関する取り組み

1 小中一貫教育の研究推進における授業の改善

今年度は、市教育委員会指定“小中一貫教育研究”の第2ステージとして、年間8回の小中合同研修会を開催した。合同研修会を続ける中で、前述したように「言語活動の充実」を小中共通のねらいとすることに決まった。そこで、9月以降1人1研究授業を行い、都合のつく小中学校の教職員が参観し合って授業研究会を開き、意見交換を行うことにした。9月以降の合同研修会では、各自が研究授業の指導案原案を持ち寄り、学校や学年、教科の垣根を越えて授業づくりの話し合いを行った。

しかし、今年度は、1人1研究授業を実施し、それを参観し合うことで精一杯で、互いの授業研

究会にまで参加することは時間的に困難であった。本研究では、授業研究会の充実こそ、授業改善の中核として位置付けているので、次年度は、小中合同研修会のときに授業研究会も併せて実施する運びとなっている。



2 学習訓練週間の実施

①目的

新年度、新学期、学年末の時期において、「学習のきまり」の徹底を図る。

「学習のきまり」

- チャイムが鳴る前に着席する。
- 忘れ物をしない。
- 最後まで黙って話を聞く。
- 最後まではっきり発言する。

②期間（平成20年度の例）

- 第1回 4月14日（月）～18日（金）
- 第2回 9月8日（月）～12日（金）
- 第3回 3月10日（火）～16日（月）

※第3回は3年生卒業後の1・2年生を対象とする。

③実施方法

(ア) クラス用「学習訓練チェック表」(図表4-3-7)をもとに、それぞれのクラスが目標を達成しているかをチェックする。

※学級担任が朝自習の様子を、教科担任が授業の様子を記入する。

(イ) 学級担任は、自分のクラスの「学習訓練チェック表」を見て、実態を把握し、学習訓練後に「クラスの問題点と対応策」(図表4-3-8)にまとめる。

図表 4-3-7 「学習訓練チェック表」の実例

学習訓練チェック表 3年 1組							
年月 12月	0	1	2	3	4	5	6
教科		数学	音楽	国語	美術	総合	道徳
記入者							
チャイムとともに授業がスタートできたか	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	
忘れ物がなかったか		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	
最後まで黙って話を聞いたか		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	
指示されたとき迅速をし、ふさわしい姿勢で授業できたか		<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>		<input type="radio"/>	
通達欄 							

チェックの仕方できていればできなければ×
 判断しかねる場合は通達欄に具体的に記入する。

通達欄の記入時に指示に従えないことがあれば具体的に記入する。

図表 4-3-8 「クラスの問題点と対応策」※学級ごとにポートフォリオして、取り組みを振り返り活用する。

クラスの問題点と対応策 (年 組)	
問 題 点	対 応 策

3 小中一貫教育の研究推進によるコミュニケーション能力の育成と人間関係づくり

1 三校交流会

年2回6月と9月に、本校に学区内の小学校6年生と特別支援学校の児童生徒を招き、混成縦割りで16班(1班10人程度)に分かれ、「みんなで楽しむ」ことをねらいとして、中学3年生の班長を中心に1時間程度ゲームや創作活動を行い、交流を深める活動を実施している。

班内の事前打ち合わせや事前準備、学級ごとの振り返り学習の時間を確保し、そうした過程をき

ちんと経ることにより、コミュニケーション能力や人間関係を築く力、さらに中学生においては、リーダーシップとフォロアシップを育成しようとしている。

主な活動としては、“ペットボトル・ボウリング”“いす取りゲーム”“ドッジボール”“紙粘土遊び”“折り紙”“スライム作り”などである。



班内の事前打ち合せ



当日の活動(ちぎり絵)



特別支援学校の先生方と班長・副班長との打ち合せ

2 夢プロジェクト

学区内の小学校3年生以上の児童と中学生が、縦割りで16班に分かれ、一緒に遊ぶ活動をしている。班編制は、三校交流会のときの小学6年生と中学生の混成縦割り班に、小学3・4・5年生を加える形で実施している。(1班16人程度)

まず、中学生が小学校に行き班ごとに「事前の話し合い」を行う。次に、小学生を本校に迎えて「夢プロジェクト」の班活動を行う。90分程度の班活動を2回行うことにより、班内の児童生徒

間の垣根が低くなって話しやすくなり、活動の目的や方法(作戦)が共有されて、心の交流が始まる。ここでも、三校交流会と同様の能力・態度の育成をねらいとしている。

今年度は、競い合わせるにより班活動を盛り上げようと、「王様ドッジボール」(予選リーグ・決勝トーナメント)と「段ボール・アート」(コンテスト)のどちらかを選ぶ、選択制にして実施した。



開会式の様子



王様ドッジボール



段ボール・アート

3 活動の成果

本校では、各活動に対する満足度についてのアンケートは、実施していない。しかし、事後に必ず学級活動等の時間を確保して、振り返り学習を行い、「活動あって、学びなし。」にならないよう配慮している。振り返り用紙を読むと、生徒たちがそれぞれの活動に真剣に取り組み、よりよいものにしていこうと考えていることがわかる。班長となった3年生の多くは、自分がリーダーとして、みんなが楽しめるようにきちんと準備したり、班

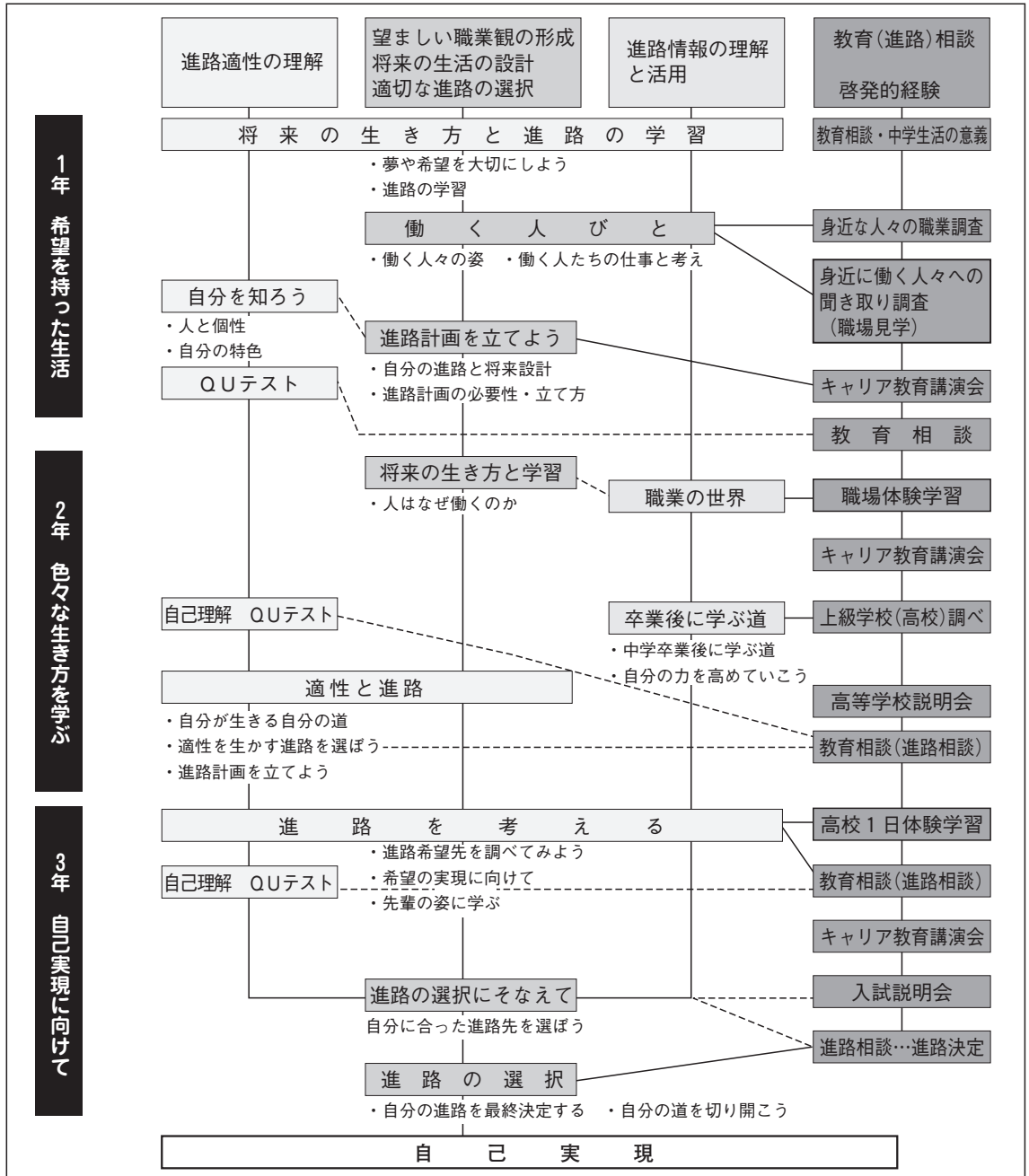
員全員に対して配慮したりしていたか、反省している。また、班員の3年生・下級生のほとんどは、フォロアーとして班長を助けて協力していたか、小学生や特別支援学校生が楽しめるように考えて行動していたか、特に声を掛けたり話し掛けたりできたか、反省している。事実、三校交流会は、1回目よりも2回目の方が、円滑に活動が進み、盛り上がる。生徒一人ひとりが、1回目の反省点を2回目に生かしている何よりの証拠である。

4 キャリア教育の推進を意図した学業生活の充実

「はじめに」で述べたように本校は、文科省の『キャリア教育推進地域指定事業』の研究協力校として研究を進めてきた。研究の進展に伴い、特別活動や総合的な学習の時間における体験活動の充実（「キャリア教育の中核をなす進路指導の題材系統図」参照（図表4-3-9））を目指して、道徳の時間や各教科との関連などについても配慮している。しかし、進路指導を充実させるために

は、学校生活の基盤である学業生活の充実を図ることが、何よりも大切である。そこで、本校では、学級活動において「学ぶことの意義の理解」や「自主的な学習態度の形成」に重点を置き、時間を確保して指導している。前述した「補充指導」や「学習強調週間」、「学習訓練週間」などが、効果的に行われるためにも、こうした意識付けや意欲の喚起が必要である。

図表4-3-9 「キャリア教育の中核をなす進路指導の題材系統図」



今後に向けて

本稿をまとめるに当たって、本校の取り組みを振り返ってみると、実に様々な指導や活動をしていると改めて感心した。担当の職員と生徒たちに感謝したい。小規模校においては、これらの活動は、一人の担当職員とクラス代表2～3人計10人強の生徒によって準備され、運営されている。円滑に運営するための役割や責任は、職員だけでなく生徒たちも大きく重いのである。

だからこそ、生徒と職員の信頼関係や生徒間の交友関係が、常に良好な状態にあるよう十分な配慮と実態に即した対応が必要であり、また、良好な状態であれば、職員の組織だけでなく生徒の組織(生徒会専門委員会や〇〇実行委員会など)も効果的に機能するのである。さらに、それぞれの

組織が効果的に機能して諸活動が充実すれば、人間関係は良好な状態で維持されるはずである。こうしたプラスの循環が繰り返されるよう、全体をコーディネートするのが校長の役割であり、責任であるのだが、今のところは、職員の頑張りや生徒たちの真面目さ・素直さに助けられている。

本校にとって、今後の最大の課題は過疎化や少子化に伴う生徒数の減少である。学年が次第に1学級になっていく可能性が大きい。そうになると、職員数も減員になるので、これまで成果を上げてきた様々な活動や指導も、「選択と集中」をせざるを得なくなる。